

山鹿市文化財調査報告 第1集

くま べ やかた
隈 部 館 跡 III

2006年

くまもと けん やま が し
熊本県山鹿市教育委員会

山鹿市文化財調査報告 第1集

^{くま}隈 ^べ部 ^{やかた}館 跡 III

2006年

^{くまもと けん やま が し}
熊本県山鹿市教育委員会

序 文

本報告書は、県指定史跡・限部館跡で実施した縄張り測量調査を中心にまとめたものです。今日、山鹿市では合併前からの課題として、県指定史跡・限部館跡を国指定史跡への格上げに取り組んでいますが、本書は、その基礎資料となるものです。

これまでも、館跡の測量調査が実施された事があります。ただし、12年前の事で、それも、一部区域については、竹林などの密生により調査を阻まれた箇所があり、完全ではありませんでした。そこで、合併前の菊鹿町が実施しました「緊急地域雇用特別基金事業」や「緊急地域雇用創出特別基金事業」による草刈・伐採作業等により、調査環境が整いましたので、本年度に総合的な測量調査に踏み切りました。今年度は限部神社から南域を目標としましたが、本書に見る様に大きな成果がありました。本報告書にはこの他、礎石建物跡の再調査結果も収録しております。

本書が文化財への理解を深める手助けとなり、併せて研究資料として御利用いただければ幸いに存じます。

平成18年 3月29日

山鹿市教育長 田 中 宏

本文目次

第Ⅰ章 調査の概要	1
第1節 調査の組織	1
第2節 調査の進展	1
第3節 限部館の概要	2
第4節 限部館と猿返城について	5
第Ⅱ章 調査の成果	9
第1節 限部館跡の現状	9
第2節 礎石建物群 西島眞理子	13
〔建物跡1〕	13
〔建物跡2〕	15
〔建物跡3〕	17
〔建物の性格について〕	18
〔遺構の建築年代について〕	19
〔付記〕庭園跡について	22
第Ⅲ章 まとめ	23
写真図版	25

挿図目次

第1図 熊本県山鹿市(旧・菊鹿町)位置図	1	第8図 建物跡3 実測図	17
第2図 限部館跡周辺地形図	3	第9図 細川管領第(洛中洛外図屏風)	20
第3図 限部館跡・猿返城跡周辺地形図	6	第10図 江馬氏館遺構図	20
第4図 限部館跡周辺字図	7	第11図 主郭遺構配置図	21
第5図 限部館跡全体測量図	11	第12図 庭園跡 実測図	22
第6図 建物跡1 礎石実測図・断面図	13	第13図 庭園跡 南側より	22
第7図 建物跡2 礎石実測図・断面図	15		

写真図版

図版1 隈部館跡 航空写真 南→北

図版2 建物跡1 西→東

図版3 建物跡2 東→西

図版4 建物跡3 西→東

図版5 庭園跡 南→北

図版6 庭園跡 西→東

図版7 庭園跡 近景

図版8 建物跡から庭園跡を望む

図版9 庭園跡から建物跡を望む

図版10 主郭入り口 9段の石段

図版11 主郭南下 柵型遺構

図版12 堀切③を西方向から見る

図版13 区画Ⅰの平場を南方向から見る

図版14 隈部神社北側の堀切② 東→西

図版15 堀切②から西下を望む

例言

1. 本書は熊本県山鹿市菊鹿町上永野に所在する、県指定史跡「隈部館跡」の調査報告書である。今年度は、主郭部分の隈部神社から南城を測量調査の対象とした。さらに礎石建物跡の再調査を行った。
2. 調査は、山鹿市教育委員会・菊鹿分室が主体となって行った。
3. 調査に際しては、上永野地区から多大な協力を得た。
4. 本書の執筆は原口隆志が、大田幸博氏（県立鞠智城・温故創生館長）の指導を受けて行った。
5. 礎石建物群の推敲は、西島真理子氏（熊本県建築士会・調査研究委員会副委員長）に玉稿をいただいた。
6. 測量調査補助と図面および資料整理は石工みゆきさんと溝口真由美さんが行った。
7. 本書の編集は、原口と大田氏で行い、溝口さんの協力を得た。

第3節 隈部館の概要

館跡の一带は、昭和40年初期に、ミカン畑として開墾された。しかし、遺構の密集する館跡の中心部だけは、地元の意思で手が付けられず、そのままの状態、今日に残った。その際、地区の長老格であった中満源平、石坂仁八両氏（いずれも故人）の呼びかけによる所が大きい。保存区域の設定が、中心部に限られた事については、40年以前の事でもあり、致し方ないところである。幸いな事に、その線引きによって、隈部神社の裏側にあたる山腹ラインと、その西側斜面も、旧地形のままで残る事になった。今となっては、「それで、よし」としなければならぬ。

中心区域は、縄張りという主郭部分に該当する。標高345m前後の山腹に、造成された正方形の広い平坦地があり、ここから南下の眺めは、絶景である。麓直下の桑原・高池両集落との比高差110～140m、山を下った幸山地区の「溝口」からは、230mにも達する。これらの地は、隈部館の麓集落である。館跡に立つて麓を眺めれば、館というより誓の感じがする。

枯死したが、以前、主郭内には、勇壮な松の老木もあり、一部で露出していた土台石群の存在と相まって、地元でも、昔から特別な区域としての認識が強かった。現に、主郭の北東側にあたる一角には、小山状の高まりがあって、隈部神社が建立されている。この地にあった石祠が、神社勧請の呼び水になって、昭和11年3月に建てられた。樹型の虎口から続く主郭の上り口には、鳥居も建ち、神社は、館跡のシンボリックな存在になっている。隈部氏の命日には、拝殿で供養も営まれる。現況からして、城時代にも神社が存在した可能性が非常に高い。廃城後も、館と地元の精神的な繋がりは、綿々と続いてきた事を意味する。

館跡は、北東方向の城床（標高685m）の高山から下る山腹中に位置する。地形の変化点にあたり、縄張りの始まるあたりから、山腹が急に傾斜角度を減じて、末広りの緩傾斜地となっている。その地形を最大限に利用したもので、山腹を大規模にカットして、主郭の広い平坦地が造成されている。全体の縄張り、この主郭を軸に、城床に続く山付きの北東方向に、計二条の堀切が走り、西側斜面に小段群を見る。防禦面からは、主郭裏側の山腹に刻まれた堀切の規模が小さい事が特徴である。築城者は、館の裏側にあたる山付き方向からの攻撃を、想定していなかった様に感じられる。

これに対して、正面側の主郭の南西縁下には、大規模な堀切が設置されている。山腹の段差下を東西に大きく掘り割ったものである。堀の肩部分にあたる主郭側の崖面は、急峻に削り落とされて、堅固な守りとなっている。素掘りで、堀壁に石畳の痕跡は無く、堀切の東側寄りには、（伝）馬屋跡の張り出し区画が付いている。なお、この馬屋区画の中央部分を南北に走行する凹道は、近代に木材搬出のために造られたものと解釈される。

地図上での直線距離にして220m下の（伝）大手門箇所から（伝）登城道が上がっている。ミカン畑に開墾された際に舗装されたが、ルートは、そのままである。この登城道は、馬屋跡の西縁下を通り、大規模堀切の底部に至り、そこから樹型に折れ曲って、馬屋跡の北端に出て、主郭下の石垣を伴う完全な樹型の虎口に入る。主郭への入り口は9段の石段が現存する。

主郭内には、三棟分の礎石建物跡と、原形を留めた庭園跡が残っている。この地が山腹にある事を忘れさせる光景である。昭和49年度から3ヵ年わたり、菊鹿町教育委員会が発掘調査がなされ、検出された遺構は、そのまま整備されて、今日に至るまで、野外展示がなされてきた。

県内に所在する中世城館の数は、533の多くを数えるが、その中で、隈部館は、まぎれもなく、トップクラスに位置付けられる館跡である。歴史的にも「肥後の国衆一揆」に関連した城館の一つとして知られ、城主の隈部親水は、一揆の中心人物である。一揆勢力が、最後に立て籠もった田中城は、平成14年度に国指定史跡となっている。

第4節 限部館と猿返城について

〔限部館の呼称〕

中世文書に「限部館」と明記したものはない。良く知られた江戸時代半ばの地誌『古城考』と『肥後国誌』には、「猿返城」「水野城」との記載がある。特に『肥後国誌』での猿返城の記述内容は、限部館の様子を良く伝えて興味深い。著者は、今の限部館が、猿返城そのものであったと解釈している。この書より古い、江戸初期の『国郡一統志』は「限部城」、新撰事蹟通考は「長野城」と記している。地元の上水野では、今日まで「御屋敷」「限部さん」「館（たち）」と呼んできた。「限部館」の名称は、昭和49年3月に県指定史跡となつてからである。しかし、元来、「限部さん」とも呼ばれていたもので、短期間で「限部館」の名称は、一般に定着した。

限部館の北東側背後に、二つの山頂があり、地元で「城床」「猿返し山」と呼んでいる。県指定後、城床は、猿返城と解釈され、限部館と猿返城を分ける考え方が確立した。しかし、本来は、山腹の館区域と、山頂の砦区域で、『肥後国誌』での「猿返城」を構成する一つの城館である。これらの事については、Ⅲ章の「まとめ」で論を展開する。

〔猿返城の概要〕

館の北側に登える連山の内、標高685.82m（最高所）の高山に築かれた砦跡である。山腹に位置する限部館との比高差は340mもあり、台形状を呈する山容は、さながら館に対する橋の様相を呈する。「城床」の山頂から標高619m強までの、館に面する南西側山腹に砦としての遺構が残っている。

登山道は、館背後の急な北東斜面を登攀する岩場ルートと、北東方向へ2.7km離れた谷部からの尾根線ルートがある。岩場ルートは、谷伝いの穏やかな山道から、危険を伴う程の急斜面を上る山道である。物資の運搬には不向きで、緊急時に使用されたと思われる。尾根線ルートは、林道八ヶ岳の枝道・横尾線の脇に入口がある（真の登山口は、これより下方の上園地区にある）。尾根線を直線的に登り、途中の山腹の切れ目から、つづら折りの山道となる。そこから、猿返城と米の山城を結ぶ尾根道に上っており、急な傾斜の山腹を登る事になる。横尾線の入り口から山頂までの所用時間は、約45分。

平成8年度の測量の結果、山頂から南西側の山腹に、8箇所の削平地（Ⅰ～Ⅷ郭）が存在する事が判明した。中でもⅡ郭には、南縁に土塁が残っており、空堀の埋没が考えられる。この事を、『肥後国山鹿郡村誌』は「堅堀切七行アリ長三十間甚不深其下断岸」、『山鹿郡中村郷地誌』は「切岸ノ上ニ堅堀七筋アリ長三十間計深二尺ハカリニシテ広カラス」と記している。これは、踏査記録に外ならず、先学者の努力に敬意を表したい。

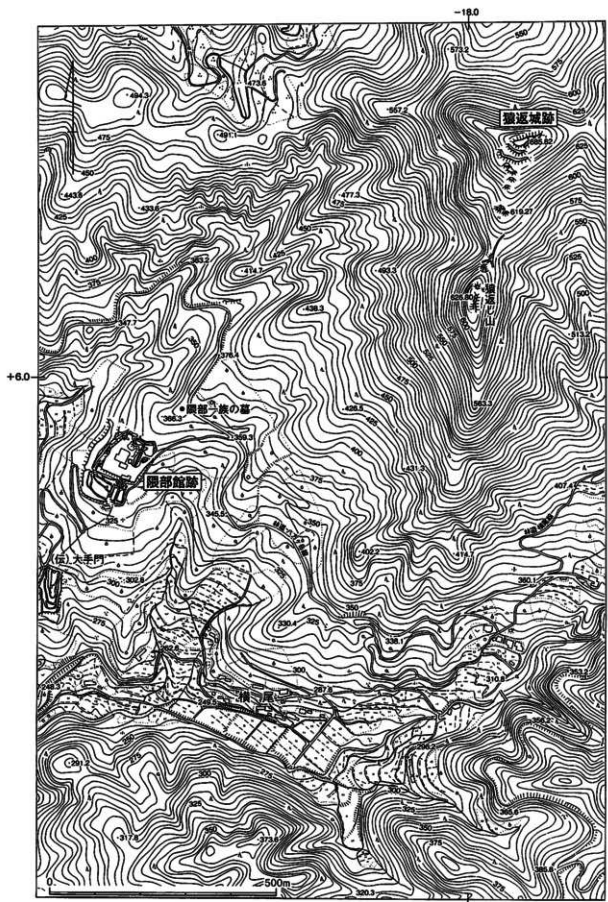
猿返城跡は、真の砦跡である。有事の際は、各郭に守備兵が配置されたのであろう。館城を高所から眺められる場所として最適である。敵勢の動きを監視し、万一の場合は、逃げ込みの場としても活用できる。館の裏側から食糧や、武器、兵士を送り込む事が出来る。この事は（故）木庭春生氏（元町文化財保護委員長）も強説しておられた。

猿返城跡は、50年以上、人の手が加わっていない荒地であった。その為、測量調査時の、雑木や下草の伐採は、極めて困難であった。地元の方の協力で、無事に調査を終える事が出来たが、数年後に、城跡を訪れた時は、すっかり以前の荒地に戻っていた。足の踏み場も無い状態になり、山城の宿命を感じた。「猿返城」の認識については、今、一度、再考すべき時期に来ているのかも知れない。

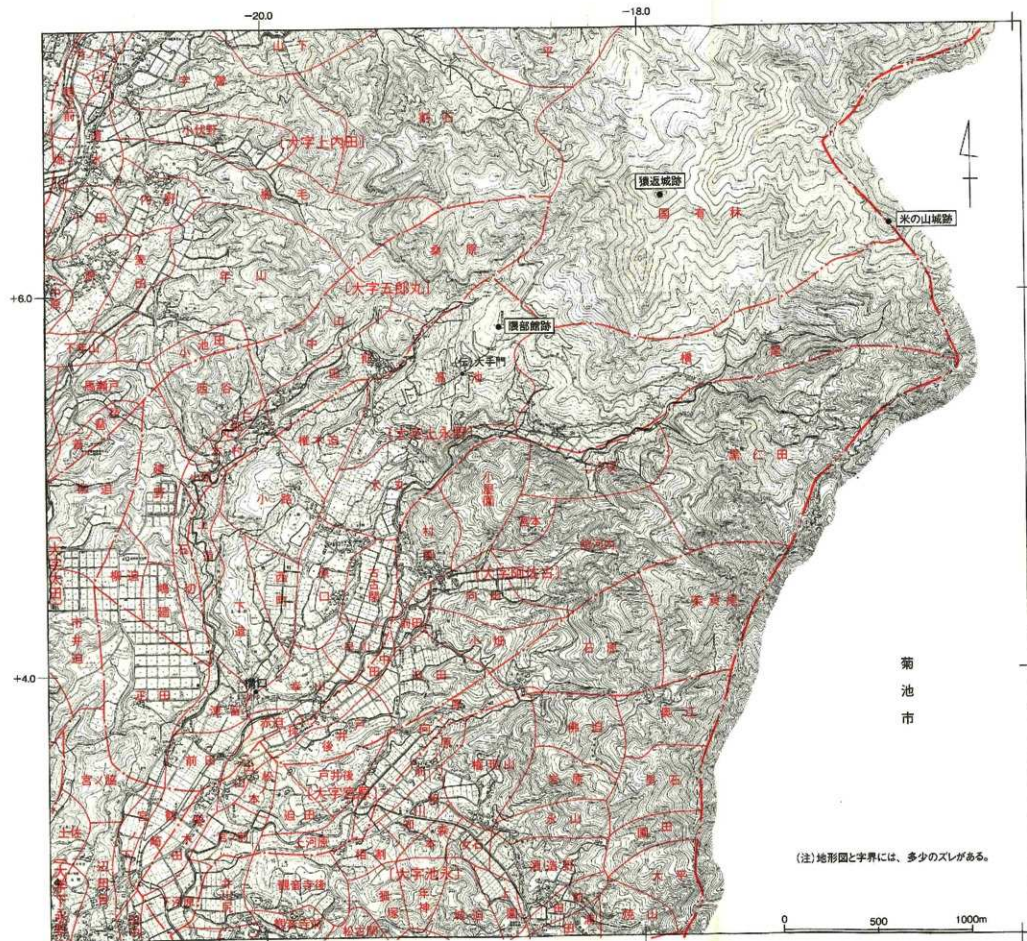
〔肥後国誌〕

猿返城跡 此城跡大手外形ノ跡城ノ礎石并若殿 親安カ事歟ノ部屋ノ跡庭石泉水ノ跡花園ノ跡等干今歴然タリ

（注）第3・4節の記述に際しては、地元の中調宣道氏（前：南鹿町文化財保護委員長）から多くの示唆を受けた。



第3図 腰部館跡・猿返城跡周辺地形図



第4図 隈部館跡周辺字図

第Ⅱ章 調査の成果

第1節 限部館跡の現状

1. 主郭

緩傾斜地の山腹を造成した広い平地である。長軸102m、短軸78～82mの長方形・区域に大幅な手が加えられている。中央部の標高は346m、地形的な制約のため、全面の平地確保までには、至っていない。山付きの北東側を、長さ・幅共に57m分、削り残す格好になって、舌状形の小山が、平地側に向かって張り出している。築城の際に、これが地形の制約によるものか、別目的で意図的になされたものかは不明。今日、この残丘の頂きには、限部神社が建立されて、帯状に下る小山の裾部は、格好の参道となっている。神社と平地の比高差は8.0m、余りに収まりがよく、古くから存在した様に思えるが、神社の建立は昭和11年3月の事で、それ以前は、石祠が祀られていたに過ぎなかった。しかし、現況から推測するに、城時代も、この区画に、館の守り神的な「お社」があった可能性が極めて高く、そのための意図的な残丘の可能性が高い。

平地は、山付き側と南西端で約2.0mの比高差を有するが、見た目に完全な平地をなす。中心部には、二棟の礎石建物跡がある。北隣りにも角礫の密集箇所があって、2棟が並ぶ様に見えるが、柱位置が不明なため、建物構造が確立されていない。これらの遺構は、昭和49年から30年にわたる町教委の発掘調査によって検出され、その後、野外展示されてきた。一方、東隣には、原形を留める庭園が残り、館跡に相応しい様相を呈する。山中にいる事を忘れさせる程の景観である。

周囲の斜面部は、南側が、そのまま堀切③の堀壁となり、急峻な堀壁を形成する。削り落としの痕跡が顕著で、入城者に威圧感を与える。西側も同様であるが、法面に小段が付いている。上位の小段は、小規模で、足掛かり的なものであるが、下位箇所は、細い帯状をなし、大走りの様相を呈する。東側は、整備された林道が、直く下を館の縁に沿って延びている。山付きの北東側は、堀切②が山腹を断ち切った状態にある。

2. 堀切③

主郭の南下を走行する大規模な堀切である。地形の変化点となる山腹の段差下に造成されており、東寄りには本格的な土橋の通路を設けている。堀切の長さは、通路を境にして西側で70m、東側は林道で削られて20m分を残すに過ぎない。図面上での計測値になるが、上場幅は、西側で18～21m、東側で13m。

堀底は、西側で全体幅12～6m。段堀で、主郭側の堀底は幅2m前後に狭まり、隙子堀の様に凸凹している。これが、後世の侵食によるものかは不明。東側は4～6m。主郭との比高差は、段堀の上で6.9m、下で8.4m。一方、堀切の南肩部に積まれた土塁①と段堀上との比高差は1.4mに過ぎない。

3. (伝)馬屋跡

堀切の土橋から南側に突き出した区画で、長軸27m、短軸24～26m。区画を二分する形の通路は、後世に作業道として造られたものと解釈する。土橋側を除く三方に石塁が廻っているが、廃城の際に、上位が壊されて残り部分が埋め殺された事が、昨年度の調査によって判明した。

4. 堀切②

限部神社の北裏側にあり、その形状は、東寄りで大きく折れ曲がり、電光瓶の様相を呈する。西側は、一旦、高さを減じて塹壕に変化している。上場幅5.0m、底部幅2.0m弱。堀壁の残存は、極めて良好である。

5. 西側斜面

上位には、7箇所へ三日月形の小段が残っている。足掛かり的なものと推定され、他の中世城跡でも数多く見られる(典型的な事例としては、球磨郡あさぎり町の「永里城跡」がある)。下位には、帯状の削平地が走り、大走りの様相をなす。全長67m、幅5.0m～3.5m、主郭西縁との比高差は、中央箇所で8.0m。北端は、一段高くなって、小段が付いている。比高差1.4m、長さ19m、幅6.0m。

6. 区画Ⅰ

(伝)馬屋跡の西側区画で、間に通路を挟む。平地ではなく、開墾のために4ブロックに細分される。全体地形は、長方形を呈し、長軸63～68m、短軸39～50m。最上段は、旧地形を保ち、北縁に長さ38mの土塁が残る。区画内の裾部との比高差は1.8m、堀切③の南側肩部に積まれた土塁でもある。区画は、南北ラインで3段に分かれ、両縁の比高差5.0m。主郭の南下に、馬屋と区画Ⅰを配置すれば、縄張りとして、上手く収まる。

7. 主郭東縁下の林道

主郭の南東隅では、比高差6.9mに達するが、林道は、これより、山付き側へ上がつて、主郭東縁との比高差が、北側で1.0m程に縮まる。主郭の東縁下がこの程度の地形である事に驚きを感じる。林道下に空堀の埋没は、考えられない。林道の存在を除外しても、山腹は緩斜面で、東側の守りは弱い。

8. 腰部神社

残丘の上面は、10m×25mの平地となっている。参道にあたる裾部は、図面上で、長さ47m、幅2.0m、西下からも、登り道が付いている。堀切②に伴う土塁が、神社の北縁をなす。土塁は、弧状をなして全長4.0m、敷地との比高差1.4m。神社は、昭和11年3月20日に落成した。

9. 主郭からの出土遺物について

『ふるさとの自然と歴史』第66号(昭和52年3月刊行)

戦国期の有力国衆の館跡(熊本県指定史跡隈部館) 桑原憲彰著より抜粋

出土遺物と水鳥の石

初年度(昭和49年度)に土師質土器(燈明皿片)2個体分、二次に泉水底部より、土師質土器破片が2、3片出土した。本年度(昭和51年度)に影青青磁と思われる楕円の口縁をなす湯呑み片、胎軸のかかった陶器片、明代の青磁片が3片、それに鉄製の角釘が3本出土している。その外、凝灰岩を楕円状に削りぬいた水盤と思われる足の付いた石製品が2個分出土した。過去2年に亘って調査を実施してきたが、このようにほとんど見るべき遺物は出土していない。

※今日、遺物は散出しており、実見できない。桑原氏の論文が唯一の資料である。

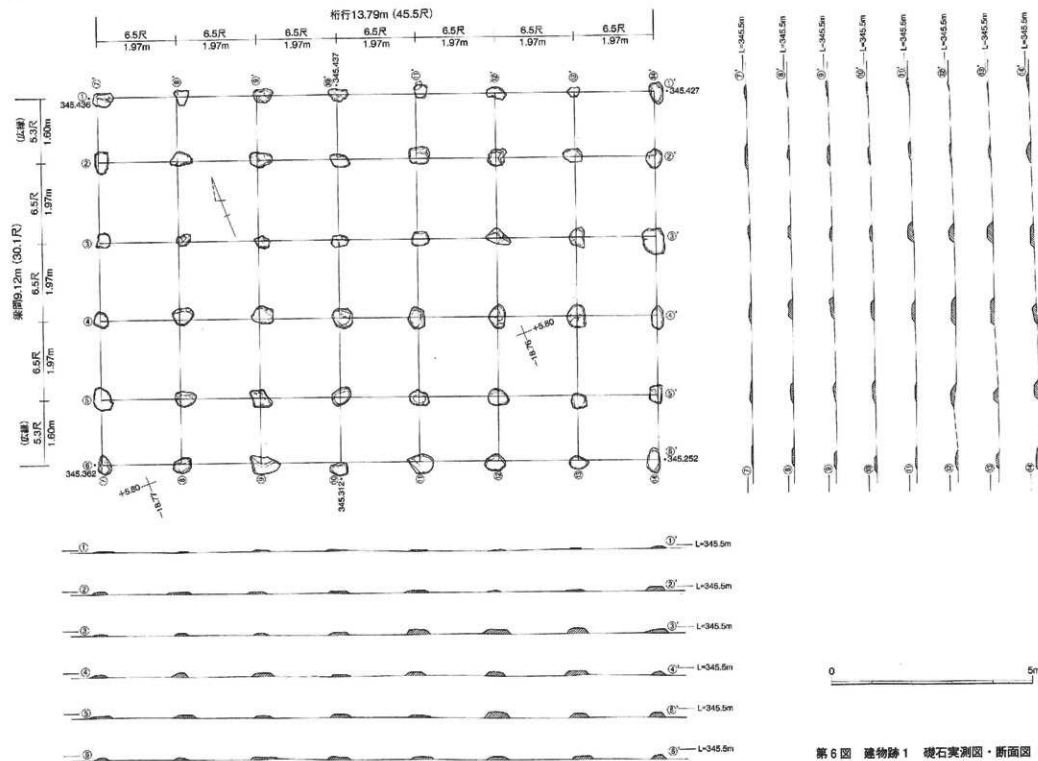
※(昭和49年度・昭和51年度)は、今回加筆した。発掘調査は、昭和49年度から3ヶ年、菊鹿町教育委員会を主体として実施され、県文化課の技師であった桑原憲彰氏が調査に参加された。年度毎の調査は、極く短期間であった。

第2節 礎石建物群

熊本県建築士会 調査研究委員会副委員長 西島眞理子

【建物跡1】

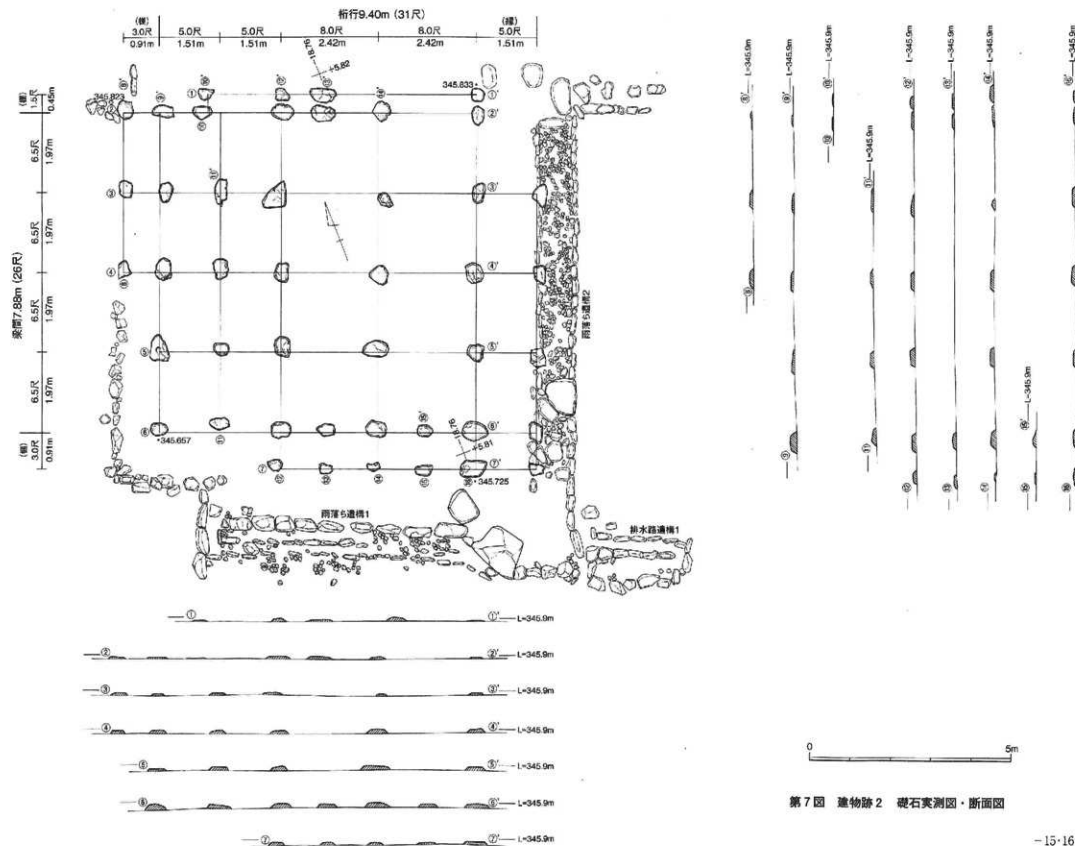
梁間5間×桁行7間の礎石建物。規模は、梁間9.12m (30.1尺) 桁行13.79m (45.5尺) を測る。梁例は、南から5.3尺、6.5尺、6.5尺、6.5尺、5.3尺である。両端に5.3尺の広縁が付き、中の3間分(合計19.5尺)が部屋内(おそらく畳敷き)と推定される。桁行の柱間は、6.5尺の均等割りとなる。1間=6.5尺を基準としている。



第6図 建物跡1 礎石実測図・断面図

【建物跡2】

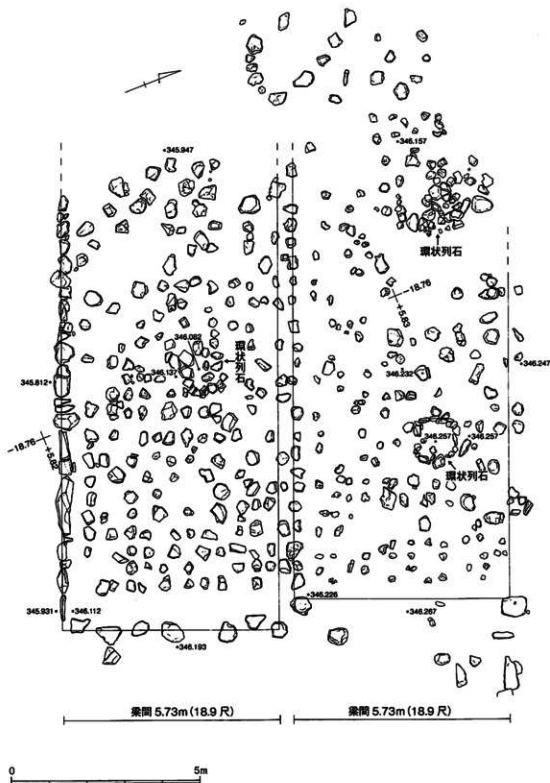
梁間4間×桁行5間（桁行は等間隔ではない）の本体に、3.0尺×21.0尺、3.0尺×13.0尺、1.5尺×22.0尺の張り出しが取り付け付いた礎石建物。張り出しは、床・棚や付書院、水屋や道具収納棚あるいは縁側と思われる。梁間は、6.5尺の均等割りである。桁行については、庭園側より5.0尺、8.0尺、8.0尺、5.0尺、5.0尺となる。庭園に接した5.0尺は「縁」ではないかと推定する。この建物も1間=6.5尺を基準としている。なお、庭園側に面した北側の隅柱礎石は移動したのではないかとと思われる。



第7図 建物跡2 礎石実測図・断面図

〔建物跡3〕

角隙が密集した状態にあり、長方形の区画を造り出している。梁間3間の建物が2棟分あるように見える。しかし、柱位置は明確ではなく、裏向きに据え付けられた礎石もあり、礎石の移動あるいは持ち去りが考えられる。床は転ばし根太を置き、その上に板を張ったのではないかと考えるが、尖った礎石もあるので断定できない。3カ所の環状列石は炉跡の可能性がある。



第6図 建物跡3 実測図

〔建物の性格について〕

隈部館には、どのような建物が建てられ、どのような空間であったのかを考えてみる。近年の発掘調査から、室町時代の守護大名や在地領主の居館について様々なことが明らかにされている。足利義満によって造営された將軍邸「室町殿」（通称「花の御所」）において確立したとされる新しい武家の邸宅様式が規範として、地方の居館に取り入れられている（図1110）。洛中洛外園屏風（歴博甲本、上杉本等）の將軍邸や細川管領邸に見られるように、敷地は方形で、外周は堀や塀で囲まれていた。正面には「正門」と「脇門」、その中の広場の奥には現在の玄関に当たる「遠侍」、公式の会見の場である「主殿」、社交や遊興の場である「会所」、会所に接した庭園、奥には当主の日常生活の場である「常の御殿」や「台所」等の建物群が配置されていた。特に庭園は、会所に伴うものとして設けられ、室内からの視点に対応した方向性を持ち、床・欄への美術品の飾り付けと同様に客へのもてなしの装置であるともいわれている（図210）。守護大名や在地領主連は、將軍邸を真似ることによって、その空間で行われる作法・儀式等も倣い、幕府との結びつきや自己の権威を誇示したのであろう。このような庭園を持った様式が広まっていたのは、有力在地領主館においては15世紀前半頃、守護館では15世紀末～16世紀前半頃が最盛期といわれている（図310）。

これらの発掘例の中で、隈部館と同程度の規模のものとして、飛騨の江馬氏館、美濃の東氏館、信濃の中野氏館があげられる。いずれも、規模は80～100m四方の方形の敷地で、庭園には石組みの池が築かれていた。江馬氏館には、2つの「門」、「遠侍」、「主殿」、「会所」、「常の御殿」、「台所」等が確認されている（図410）。西日本では、周防の大内氏館、豊後の大友氏館、安芸の吉川元春館等が同様な構成としてあげられる。大内氏や大友氏の館は守護館であるため大規模であるが、大内氏館の発掘調査によると、16世紀前半の遺構に、庭園（枯山水様式）と共に近接して礎石建物跡が発見されている（図510）。

これらの類例から推察すると、隈部館も同様の構成ではないかと思われ、建物1は「主殿」、庭園に面した建物2は「会所」、建物3の2棟は、「台所と居間」と考える。建物1の「主殿」は、梁間5間・桁行7間の建物で、東側の両端は広縁と思われる。広縁のみ5.3尺であるが、部屋内は、1間＝6.5尺を基準として3間×7間である。内部の部屋割りは現時点では明らかではないが、建物の性格を考えると、地方であっても床・欄・付書院を備えた正式な書院座敷が設けられていたであろう。また、瓦は発掘されていないことより、板葺き、こけら葺きあるいは草葺きが考えられる。庭園は、後方の猿返し山を背景とし、斜面となっている山の裾野を庭内に取り込み、その前に石組みの滝と池を配置している。発掘により水路が発見されたということであるので、池には水が湛えられていたであろう。この庭園に接して会所が建てられ、会所の座敷からは、座って庭園が鑑賞できるようになっていた。建物2の「会所」は、主殿のような格式を重んじた建物ではなく、武家独自の社交や遊興の場という性格を持つ空間であった。隈部氏は、会所に客を招き、四季折々の庭園を鑑賞しながら、連歌や茶を催したのであろう。建物3については、3間×6間程度の建物が2棟並んでいるように見えるが、柱位置が明確には読めない。床は、転ばし模太を並べ、板を張ったのかも知れない。3ヵ所の環状列石が伊豫であるならば、領主の私的空間、すなわち炉を囲んで食事をしたり、くつろいだりする居間のような空間ではないかと考える。しかし、隈部館全体の発掘調査を待たなければ、この建物の性格を確認することはできない。

戦国時代には、山上に城を築き、その麓に居館を持つ例が数多くあげられる。隈部館は、詰めの城とされる山上の猿返城の西麓に築かれた居館であるが、標高が345mあり、集落からは比高差が110mある高地に位置している。また、正面には、土塁や堀切、そして低い石垣を積んだ柵型の虎口、屋敷地両側面は切り立てられた急峻な土手、山の斜面と接する背面は堀切といったかなり強力な防御体制を備えており、山城そのものの内部に館を構えたとも思える。他の発掘例との相違点は、地域・地形・時代によるものなのか、あるいは特異性なのか、今後発掘される近辺の類例との比較により明らかにされると思われる。

〔遺構の建築年代について〕

隈部氏はいつからこの地に居館を建てたのか、遺物等の年代を示すものは発見されていないが、4人の領主の時代を取り上げて建築年代を推定する。

1. 忠直（1426～1494没）の時代

文明13年（1481）、守護大名菊池重朝により隈府において「万句連歌発句の会」が二十亭で催された時、忠直は第三亭の席主をつとめた^{〔註6〕}。その当時の館には、連歌を催すに足る眺望や庭、また室礼などを考慮した部屋を備えた建物^{〔註7〕}を整えていたと思われる。忠直は、菊池重朝に仕え、文化的なことに力を尽くした人物である。文明4年（1472）には、重朝に協力し孔子廟を建立する。そして、文明8年（1476）には、朱子学の第一人者である南禅寺の僧桂庵玄樹が隈府に下向した際に師事している。桂庵玄樹の出身地である周防には、その当時多くの文化人が集まっていた。大内氏の蔡山館には連歌師宗祇が訪れ^{〔註8〕}、そして、玄樹と京都で親交の厚かった雪舟^{〔註9〕}は、周防に庵を結んでいた。諸国を巡る宗祇などの情報伝達者によって庭園文化の情報が伝播し、その先で新奇な趣向を付加され、それがさらに伝播するといったネットワークが形成されていたのではないかと^{〔註10〕}も言われている。

2. 武治（生没不明）・貞明（～1539没）の時代

隈部親榮氏の『清和源氏 隈部家代々物語』に「武治…後に永野猿返城に移る。…」「貞明…八方ヶ嶽猿返城を本拠として城郭を拡張防禦を修して同城を難攻の堅城とし給う。兼々私館を城外に構えて居住せしという。…」「…猿返城は…初め隈部家の砦なりしが、武治公、貞明公の二代に亘りて城域を拡張し、…」と記されている。貞明の頃には「難攻の堅城」にしなければならなかった周囲の逼迫した状況があったのであろう。また、貞明は、天文8年（1539）館登り口下にある清潭寺に葬られている。

3. 親永（～1588没）の時代

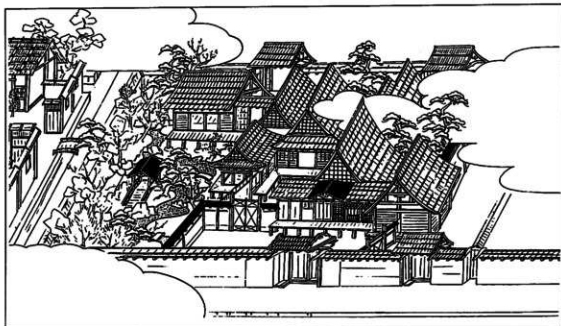
16世紀の初めころから守護大名の菊池氏が衰退し、16世紀の半ば近くには没落する。菊池氏三家老は隈部氏・赤星氏・城氏であったが、その後、親永は赤星氏を撃破し、隈部氏の勢力が最も興隆した。

隈部氏はいつ頃からこの地に居住したかを考えてみる。「万句連歌発句の会」を行った文明13年（1481）には、隈部氏の一族である阿佐古氏・長野氏は、この館近くの阿佐古・長野地区を領していた。そして、館登り口下にある清潭寺は、もと内田相良氏の菩提寺だった寺を隈部氏が再興したとされており、寺の前面に立つ逆修塔には、「富田安芸守源直方敬白」「…大永八年（1528）…」と刻まれている。直方は、隈部忠直の長子の系統であり、系図には「修補 清潭寺」と記されている^{〔註11〕}。また、伝承ではあるが「富田安芸守邸宅」の跡が館と清潭寺の間の「大手門」と言われている位置にあること等より、隈部氏は16世紀初めにはこの館に本拠をもっていたと思われる。

それでは、この礎石建物や庭園はいつ築かれたのであろうか。前述の大内氏館のように16世紀前半とされる庭園を伴った礎石建物の例もあるが、一般的には、石積みの柵型虎口や礎石建物、また1間＝6.5尺を基準とするのは戦国時代後期だと考えられる。

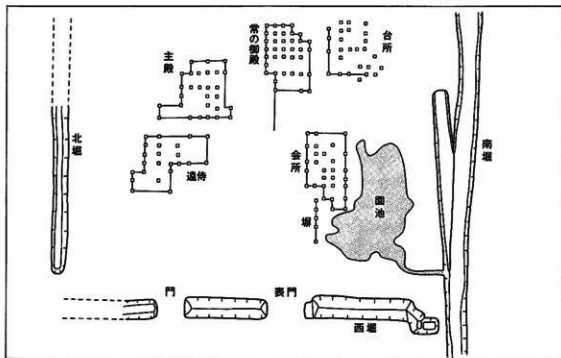
このように考えると、この館は、16世紀初め（武治・貞明の時代）に築かれ、16世紀半ば頃（親永の時代）に、礎石建物に建て替えたのではないかと推定する。将来、礎石建物の下層を発掘すると、遺物や掘立て柱建物跡が出てくる可能性があると思われる。

この館跡に立ち、庭園やそれに続く小高い山そして背景の山々を眺める時、「万句連歌発句の会」などを行った忠直の、武士としての教養の高さや他の文化人との交流の広さが思い起こされ、この館は、忠直が直接造ったものではないが、彼の洗練された文化的な素養が代々受け継がれているのではないかと、私には感じられる。



第9図 細川管領第（洛中洛外園屏風）

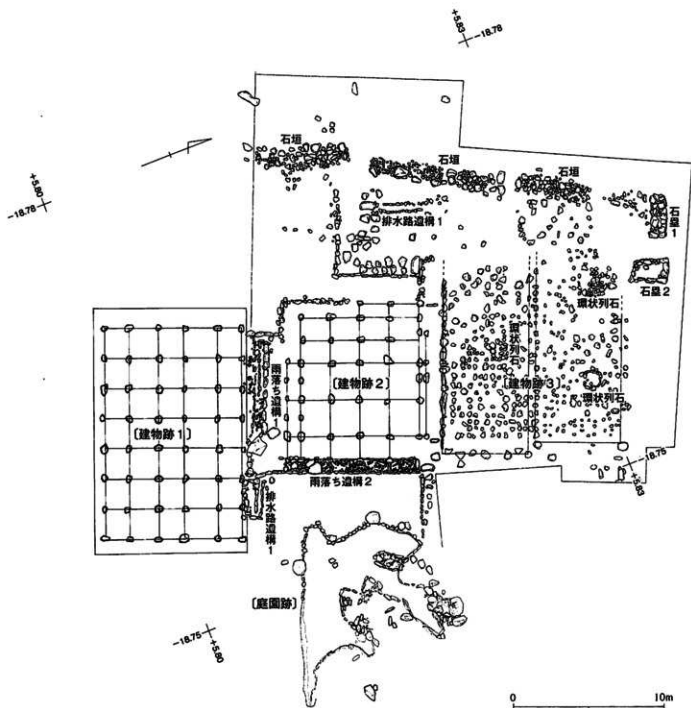
『日本建築史図集』日本建築学会1980年より転載



第10図 江馬氏館遺構図

※『江馬氏館跡Ⅱ』岐阜県古城郡神岡町教育委員会 掲載図を再トレースしたもの。

- (注1) 日本建築史 2003年 後藤治 共立出版
 (注2) 戦国時代の城館の庭園 1999年 小野健吉 奈文研 年報
 (注3) 天下統一と城 2002年 国立歴史民俗博物館 千田嘉博・小島道裕 堀宮房
 (注4) 江馬氏館跡Ⅱ 神岡町教育委員会
 (注5) 史跡大内氏館跡（結山水庭園跡） 山口市教育委員会
 (注6) 清和源氏 源氏家代々物語 1964年 源氏親典
 (注7) 文学（連歌張行の建物・部屋） 廣木一人 2002年 岩波書
 (注8) 宗義は、文明12年（1480）に大内氏の招きで園防を訪れている。
 (注9) 雪舟は、15世紀半ば過ぎに園防に移り、絵画だけでなく作庭も行っていたとされる。山口市常楽寺の資料より、「『雪舟庭園』は、もと妙喜寺の庭園で康正元年（1455）の創建。庭園は大内政弘が雪舟に命じて造らせたものと伝えられている。」とある。
 (注10) 戦国時代の城館の庭園 1999年 小野健吉 奈文研 年報
 (注11) 菊鹿史記 1996年 菊鹿町



第11図 主郭遺構配置図

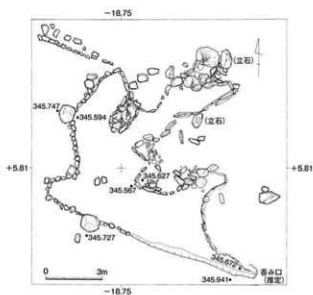
【付記】庭園跡について

①この項の記述は、『ふるさとの自然と歴史』第66号に記載された桑原憲彰著「戦国期の有力家衆の館跡」⁽¹⁰⁾の要約である。

「昭和53年3月の発掘調査で、建物跡の裏側から庭園跡が検出された。山の緩斜面とその裾部平地を利用して構築されたもので、簡素で、小振りの造りながら、まとまりを持つ。山の斜面に石を配し、深山の溪谷を2箇所に形作っている。平地部には、泉水を掘り、溪谷から流れ出た奔流が、平地部に出て淀みをつくった情景を、この泉水に写したものと思われる。使用された庭石は、遠くから取り寄せた奇石・名石の類でなく、人が持ち運びできる程度の小さな手近にある石を利用して構築されている。このために、全体的に質素な感じの庭園となっている。山の斜面に立てられた先の尖った、やや大き目の、2・3石の立石が、当時の庭園の特色を表している。発掘調査によって、池底部に土砂の沈殿が見られ、水を導入する水路が発見されたので、水を湛えた心字形の泉水である事が判明した」。

②建物跡2の東隣りに造られた庭園である。庭園を眺める為の踏み石も現存し、遺構の残存状態は、極めて良好である。隈部神社から下る残丘の裾部を築山として取り込んだもので、庭園の北側は、長方形に掘り残された残丘が、小山の様な高まりを見せる。庭園の範囲は9m四方で、立石の配列は、見事である。心字形の池底は、極めて浅いが、発掘調査後に、大方、埋め戻されているのだろう。発掘調査で検出されたという水路の現況での確認は、出来ない。

(注)本書10頁を参照



第12図 庭園跡 実測図



第13図 庭園跡 南側より

第三章 まとめ

〔名 称〕

隈部館の呼称は、昭和49年に県指定史跡になった際に付けられた遺跡名である。この事により、本来は、一つのエリアをなしていた城跡の構成要素が、隈部館と猿返城に二分された。遺跡名の変更は、再考の時期と思えるが、30有余年を経過した今日、「隈部館」の呼称が、すっかり定着してしまった。

中世文書には、城主・隈部氏の持ち城に関する記載が無い。城名は、江戸時代の藩が作成した文書や地誌が、それぞれに「猿返城・永野城・隈部城・長野城」と記しており、これらを、どの様に見るか。

明和9年(1772)に森本一瑞が編纂した『肥後国誌』の猿返城に関する具体的な記述は、まさに隈部館の様子を描いたものに外ならない。同書は、隈部館区域が猿返城そのものと解釈し、城床には、全く触れていない。

この事に関連して、『肥後見聞雑記』がある。天明4年(1784)に寺本直雄が著したもので、実地を見聞しているので、注目すべき事が多い。山鹿の記述では「此永野村は八方嶽の麓にて此村の上に隈部親永の館跡・石垣等 今残り」とある。同書は、当該の地を館跡と記して興味深い、その他の城として、日渡城のみを取り上げ、猿返城や米の山城に触れていない。

『国郡一統志』は、隈部城と明記している。この地誌は、北島雪山が藩に願って、寛文7年(1667)から3ケ年間、藩内の寺社や古蹟を調査した結果のまとめである。肥後で最初の地誌であり、中世の様相を十分に遺す書として注目される。

肥後藩の公文書に『慶安四年の差出』がある。慶安4年(1651)に、藩が古城の実態を幕府へ報告したもので、正保元年(1644)に報告された『国絵図』の説明書である。同書は、藩内を13郡に分けて、山鹿郡の場合、6城の内、上永野城として2城を並列し、それぞれ規模を60間と48間としている。規模的に、両城は皆で、米の山城と城床の猿返城の事を意味しており、隈部館の区域は、除外された格好になっている。

『肥州古城考』は、古城だけに関する最初の著作で、猿返城とある。辛島道珠が、藩命によって、天和元年(1681)から著述にかり、程なく完成したという。

『肥集録』には、永野古城と記されている。この書は、肥後の藩主と藩当局が、藩の実態を把握するため、役人が作成したメモ書きである。何代にもわたって作られたが、流布しているのは、細川宗孝時代のもので、享保19年(1734)まで記述されている。同書の第36項の「肥後国古城主之事」に米山城と共に記述されている。この書も、公文書的な性格を持つ。初版物は江戸前期まで遡り、代々、書き足したものと思われる。

以上の事から、もし可能であれば、「猿返城」・「隈部城」・「永野城」の城名に変更すべきとの判断に至る。この場合、城床は「砦」との表記になる。上代遺跡の場合はともかく、歴史時代の遺跡名は、注意しなければならない。特に、城跡の場合、複数の城名を持つ場合が多く、文献記載名との整合性も必要である。

〔主 郭〕

緩傾斜の山腹を大規模に造成したものである。山中に位置する城跡で、これ程の敷地面積を有する単郭形式の縄張りには、県内でも類例を見ない。石垣を伴う虎口の樹型遺構は、近世城のそれに酷似し、庭園や礎石建物跡の存在もあって、戦国時代後半から末期の館跡と推定されている。城壁の上からも、城主の隈部親永は、永禄2年(1559)に、当時の隈府城主の赤星道雲と戦って勝利し、天正6年(1578)に隈府城主の地位を獲得した。その後、親永は隈府城へ移り、天正15年(1587)の『肥後国家一揆』を誘発している。翌年、国衆一揆は、豊臣秀吉の軍勢から制圧され、親永は切腹、隈部氏一族も多くの関係者と共に処罰された。この歴史の流れが、隈部館に、どのような影響を与えたのであろうか。親永の時代、肥後北部での隈部氏の勢力は、絶大なものがあつた。これを具象化したものが、館の規模と内部構造であると見る。しかし、赤星道雲

との戦いの際、館は無傷で済んだのか。隈部親永の隈府城への移動後、そのまま放置されたのか。国衆一揆が鎮圧された後は、どうなったのか。様々な疑問が生じる。これについては『隈部館跡Ⅱ』で触れているが、参考資料として、(故)桑原憲彰氏の調査書^(注)を要約する。「発掘区域には、木炭・灰焼土等の火災を裏付ける状況も見られず、残された礎石群にも、炎に遭った形跡は、認められなかった。また隈部氏が滅亡後、家屋が自然に朽ち果てたという状態でもなかった。出土遺物が少ない事は、館が営まれたのが短期間であったといえる。館の最後は、建物一切を他所に移転させた事も考えられる。この時期を隈部氏の隈府城への移動時期と考える」。部分的には、調査者と見解の異なる箇所もあるが、火災に遭っていない記述は興味深い。

現存する主郭の遺構は、館の最終末期にあたり、礎石建物跡の下層には、先代の掘立柱建物跡の遺構が埋没しているものと思われる。この事については、現地を視察された岡田茂弘氏も同じ考えを述べておられる。

〔文献・金石文〕 参考文献：『菊鹿町史』

「隈部系図」によれば、文永元年(1264)に持直が、菊地武房から「隈部」の家号を賜り、白木村(菊地市電門)に居住した。鎌倉時代末から南北朝時代には、菊池氏との関係も深まり、赤星氏・城氏と共に、菊池氏惣領の老者の家としての位置を確保した。歴代の中で最も活躍したのは、忠直である。系図によると、応永33年(1426)の生まれで、明応3年(1494)に没している。

隈部宗家は、武治の時代に、上永野の猿返城(『肥後国誌』の表現)に移り、本拠地にしたとされる。築城者は、親家(貞明の子)と、親永(親家の子)の二説がある。但し、貞明は、天文8年(1539)に没して、清潭寺(隈部館麓の高池地区に所在する)に葬られており、この時期、既に、隈部氏と、当地の上永野との関係が生じていたと考えられる。同寺の大門口の逆修塔に「富田安芸守直方敬白 干時大永八年(1528)戊子三月廿一日」と刻まれるが、直方は、隈部忠直の系列に属し、父の家光の時から富田姓を名乗ったとされる。相良寺千手観音の廟内名には、「大檀那隈部上総守親氏 大願主富田安芸守直方」とある。この観音は、永正14年(1517)に修造されており(『肥後国誌』)、忠直以来の上総守を名乗っている事から、親氏が、隈部氏の家督の地位にあった事が伺われる。

この様に、隈部氏は、16世紀に菊鹿を本拠地として、勢力を大きく拡大した事が分かる。文献から推察すると、隈部館の築造は、16世紀に入ってからと思われる。

(注) 本書10頁・22頁を参照。

(備考) 昭和43年に地元で、自発的な管理組織が作られ、今日に至るまで、主郭を中心に、年数回の清掃作業が行われている。それでも、手付かずの区域もあり、これについては、本書の冒頭でも述べたが、町が政府の事業を導入して、平成13年度から4ヶ年にわたり、竹林や雑木の伐採作業を行った。

写 真 图 版



図版1 隈部館跡 航空写真 南→北



図版2 建物跡1 西→東



図版3 建物跡2 東→西



図版4 建物跡3 西→東



図版5 庭園跡 南→北



図版6 庭園跡 西→東



図版7 庭園跡 近景



図版 8 建物跡から庭園跡を望む



図版 9 庭園跡から建物跡を望む



図版 10 主郭入り口 9段の石段



図版 11 主郭南下 柵型遺構



図版 12 堀切③を西方向から見る



図版 13 区画Ⅰの平場を南方向から見る



図版 14 隈部神社北側の堀切② 東→西



図版 15 堀切②から西下を望む

報告書抄録

書名	隈部館跡Ⅲ
シリーズ名	山鹿市文化財調査報告 第1集
編著者名	原口隆志 大田幸博
編集機関	山鹿市教育委員会・菊鹿分室
所在地	熊本県山鹿市本菊鹿町下内田713
発行年月日	2006年3月29日

所収遺跡名	所在地	調査期間	調査原因
隈部館跡	熊本県山鹿市菊鹿町上永野	2005年4月～2006年3月	学術調査

遺跡名	主な遺構
隈部館跡	主郭平場：礎石建物跡1～3 庭園跡 石段 柵型遺構 (伝)馬屋跡 石垣A・B・C 登城道 土塁 堀切②・③ 小段

山鹿市文化財調査報告 第1集

隈部館跡Ⅲ

平成18年3月29日

〔編集発行〕

山鹿市教育委員会・菊鹿分室

〒861-0406 熊本県山鹿市菊鹿町下内田713

☎0968-48-3115

〔印刷〕

西本印刷

〒861-2241 熊本県上益城郡益城町宮園564-2

☎096-286-4151

文化財調査報告の電子書籍の末尾に挿入する奥付

この電子書籍は、『山鹿市文化財調査報告第1集 隈部館跡Ⅲ』を底本として作成しました。閲覧を目的としていますので、精確な図版などが必要な場合には底本から引用してください。

底本は、熊本県内の市町村教育委員会と図書館、都道府県の教育委員会と図書館、考古学を教える大学、国立国会図書館などにあります。所蔵状況や利用方法は、直接、各施設にお問い合わせください。

なお、平成17年(2005)に山鹿市、鹿北町、菊鹿町、鹿本町、鹿央町が合併し山鹿市となりました。

書名：山鹿市文化財調査報告第1集 隈部館跡Ⅲ

発行：山鹿市教育委員会

〒861-0592 熊本県山鹿市山鹿 987 番 3

電話：0968-43-1651

URL：<https://www.city.yamaga.kumamoto.jp/>

電子書籍制作日：2025 年 7 月 7 日